

## 助産師が行う性教育へのニーズ ～ 養護教諭へのアンケート調査より ～

白水 美保, 新福 絵里香, 永井 寛子

### 要 旨

教育機関で行う性教育の場に助産師が召喚され、性教育を実施する機会が多くなった。そこで今回、助産師が行う性教育の資質向上と発展を目的に、教育現場で性教育を担当することが多い養護教諭を対象にアンケート調査を実施し、教育現場における性教育の現状と助産師が行う性教育へのニーズを明らかにした。

教育現場の性教育の現状は、教育機関ごとの取り組みの差や職員間の意識の差があり、これらが養護教諭の性教育の満足感に影響していた。また、養護教諭として経験年数が増えると性教育を実施してからの成果や不成果も体験し、これらの体験も性教育の満足感に影響を及ぼしていた。さらに、性教育の難しさも多くの養護教諭が感じており、難しさを感じる要因は、自身の性に関する専門的知識の乏しさや伝え方に加え、学生自身の多様な性や発達段階への考慮、家族環境への配慮などであった。

性教育の場に助産師が必要と思う養護教諭は多くみられ、助産師の性教育は教育機関で高いニーズがあることが分かった。また、助産師の性教育に期待することは、性に関することの専門的知識の提供は勿論、いのちの大切さを実体験者として語り、学生の自己肯定観を高められ、自分や他者を思いやる心を育むことであった。しかし、一方で専門的過ぎることや先進過ぎる内容への懸念があるという意見もあり、学校側のニーズ把握のためにも事前打ち合わせを行う重要性も同時に示唆された。

将来的に性教育は、単発的な講義・講演で終わるのではなく、“いのちの教育”を根底に性科学的な内容も加味した継続的な授業の一環として科目立てされ、教育機関と専門職者が連携しながら時代のニーズに即しながら展開され、さらに発展していくことが望ましいことも示唆された。

**キーワード：**助産師，養護教諭，性教育，教育機関，いのちの教育

### I はじめに

近年、若者の性行為感染症の増加や望まない妊娠による人工妊娠中絶、若年出産が大きな社会問題になっている。

思春期における性行為感染症や望まない妊娠は、当事者であるその女性の人生においても大きな問題となり、心身共に様々な健康障害や弊害を生む。若者の性の問題に直面する機会が多い助産師達は、これらの問題を重要課題として捉え、以前から危機意識を持っていた。日本経済は発展し物的に豊かになった現代の暮らしの中で、様々な弊害がもたらされているが、若者の性の問題もその一つといえる。

このような背景から若者への性教育の重要性が社会的にも認識され、家庭での性教育は勿論、学校教育の場での性教育も積極的に行われる動きとなり、近年では、学校教育で行う性教育の場に助産師が召喚され、

講義や講演を依頼され始めた。これまで助産を生業としていた助産師自身は手探り状態で自身の体験や命の大切さを伝えるという内容の性教育を実施することとなり、性教育の重要性は認識されていても、学校教育の現場で“性”の話をするのはかなり高い壁があり、実施するには事前に教育現場から数々の制約を受けることもあった。のちに、文部科学省から思春期性教育の指針が示されたことで学校教育の中で求められている性教育の内容を確認することが出来、それが性教育を行ううえでの道標となった。

現在においても、助産師の立場から学生に向けて性教育してほしいという教育現場からのニーズは年々高くなっており、講演依頼も多い。

そこで今回、今後、助産師が行う性教育の資質向上と発展を目的に教育現場で性教育全般を担当することが多い養護教諭を対象にアンケート調査を実施し、教育現場における性教育の現状と助産師が行う性教育へのニーズを明らかにした。

## II 研究方法

### 1. 研究期間

令和2年4月1日～令和4年3月31日

### 2. 研究方法

アンケート調査

### 3. 研究対象

本研究の趣旨に同意し、アンケート調査への協力が得られたA県とB県に勤務している養護教諭158名を対象にアンケート調査を実施した。アンケート回収結果は、全回収158名中、有効回答150名、無効回答8名であり、有効回答150名のみを本研究の対象とした。

## III 倫理的配慮

アンケート用紙は無記名回答とし、個人が特定されないように配慮した。また、本アンケート調査に非協力であっても、不利益を被らないことを説明した。

また、いつでも研究協力を中止することができ、その場合であっても不利益を被らないことも説明した。

## IV 結果

### 1. 対象の属性について

今回の研究協力者150名の年齢分布は、20歳代が28名、30歳代が38名、40歳代が45名、50歳代が35名、60歳代が3名、無回答が1名であった(図1参照)。

養護教諭の経験年数は、1～5年が19名、6～10年が9名、11～15年が23名、16～20年が15名、21～25年が最も多く35名、次いで多いのが26～30年の28名であった。経験年数が最も長い31～35年は21名であった(図2参照)。

### 2. 自身の性教育への関心度について

“①関心がある・②やや関心がある・③どちらともいえない・④あまり関心がない・⑤関心が無い”の5段階の関心度のうち、“③どちらともいえない・④あまり関心がない・⑤関心が無い”と回答した者は、どの年代においても0%だった。

養護教諭経験年数が1～15年と25年以上の年代において、“②やや関心がある”より“①関心がある”の方が高値を示し、その中間である16～25年の年代は、“①関心がある”より“②やや関心がある”と答えた者の方が全体の60%以上を占め、多かった(図3参照)。

### 3. 教育機関の性教育への取り組みに関する満足度について

“①満足・②やや満足・③どちらともいえない・④やや不満・⑤不満”の5段階の満足度のうち、“③どちらともいえない”と答えた者の割合がどの経験年数にお

いても一番多かった。また、一番養護教諭経験年数が短い1～5年では、“④やや満足”と答えた者は極わずか5%みられたが、“⑤満足”と答えた者は0%であった。

経験年数6～10年においては、“③どちらともいえない”と“②やや満足”が大半を占めており、“①満足”“④やや不満”“⑤不満”と答えた者は0%であった。それ以降の経験年数においては、“②やや満足”と答えた者は減少し、“①満足”と“④やや不満”と答えた者がみられた(図4参照)。

また、不満に思う主な要因としては、職員間の関心の差や教育機関ごとに取り組み方が違うことであった。

### 4. 自身の性教育への取り組みに関する満足度

“①満足・②やや満足・③どちらともいえない・④やや不満・⑤不満”の5段階の満足度のうち、“③どちらともいえない”と答えた者がどの経験年数においても一番多かった。

経験年数1～5年の者で、“①満足”“②やや満足”と答えた者は0%であった。“④やや不満”“⑤不満”の割合が多かったのは、経験年数11～15年であり、経験年数が長くなるにつれ“①満足”と“⑤不満”の両極を答える者の割合も多くなっていた(図5参照)。

また、経験を重ねることで、性教育の成果も体験することができ、それが満足感へ繋がっていた。

### 5. 性教育の難しさを感じるか

“①感じる・②やや感じる・③どちらともいえない・④それほど感じない・⑤感じない”のうち、“③どちらともいえない”“④それほど感じない”“⑤感じない”と答えた者は0%であった。

1～10年の養護教諭経験年数が短い層に難しさを“①感じる”と答えた者が多かった。それ以降の経験年数者においては、“①感じる”より“②やや感じる”と答えた者の方が多かった(図6参照)。

また、難しいと思う要因は、職員間の性教育への関心の差、自身の性に関する専門的知識の乏しさや伝え方に加え、学生自身の多様な性や発達段階への考慮、家族環境への配慮などであった。

### 6. 助産師の行う性教育について

1) 助産師を性教育講師に依頼したことの有無について、有ると答えた者が150名中124名、無いと答えた者が24名であった(図7参照)。

2) 助産師が行った性教育の内容はニーズに合っていたかの問いでは、“合っていた”と答えた者が29%、“まあまあ合っていた”と答えた者が61%、“どちらともいえない”と答えた者が10%であった。“あまり合わなかった”“合わなかった”は0%であった(図8参照)。

3) 性教育に助産師は必要不可欠と思うかの問いでは、“思う”が85%、“どちらかというと思う”が

12%，“どちらともいえない”が3%であった。“どちらかといえばそう思わない”“思わない”は0%であった（図9参照）。

以下の通りであった。

**7. 助産師に求める性教育の内容について**

助産師の性教育に期待する内容は、次の4つに分けられた。①性に関する専門的知識の提供 138人、②生命誕生の場面やいのちの大切さの語り 142人、③学生の自己肯定観を高められる内容 110人、④自分や他者を思いやる心を育む内容 108人であった（表1参照）。

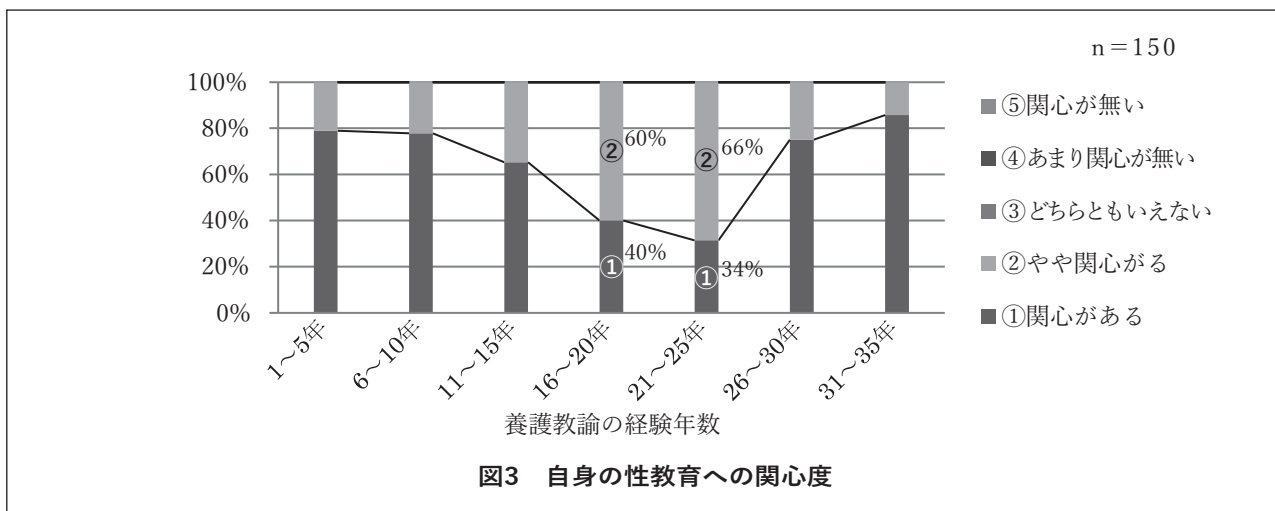
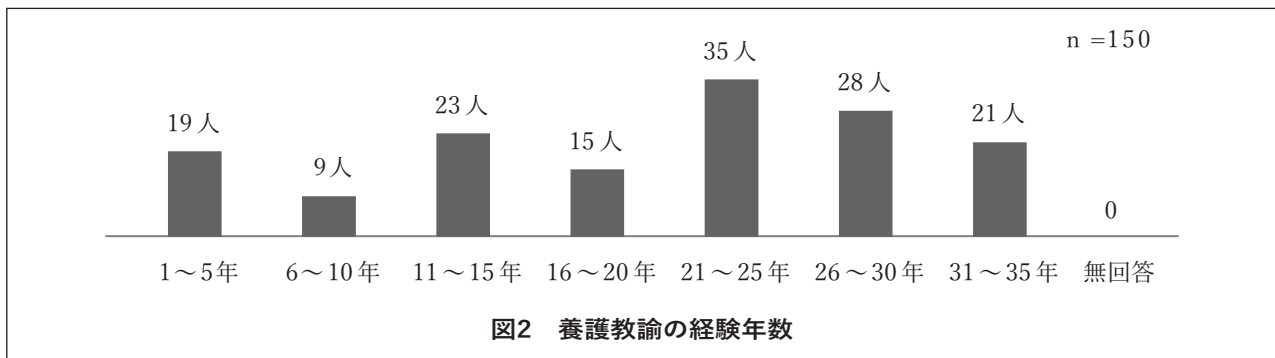
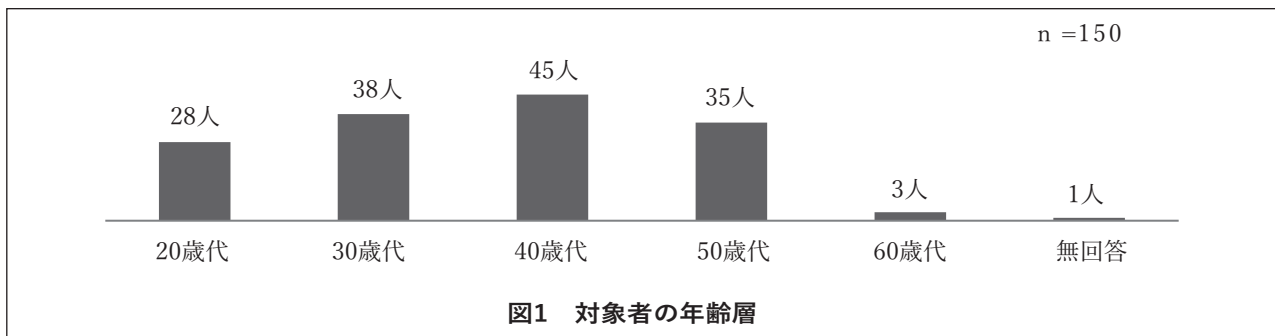
- \* 自由記述
- ・いのちの大切さと尊重
  - ・生きていることの素晴らしさ
  - ・人権
  - ・自己肯定観の確立
  - ・男女の身体の違いや成長についての理解
  - ・妊娠・出産についての内容
  - ・他人を思いやる気持ち
  - ・責任・自立について
  - ・多様な性・性的マイノリティについて
  - ・正しい知識の提供
  - ・個別性や状況に応じた性教育
  - ・言葉の使い方
  - ・講義型にならないように、参加型も取り入れること

**8. 性の専門的知識となる概念について**

リプロダクティブ・ヘルス/ライツの概念の認知度を問う際には、知っているが30%、知らない60%、言葉だけは聞いたことがある10%であった（図10参照）。

**9. 性教育の中で大切にしていることは何か**

性教育を実施するにあたり、大切にしている内容は



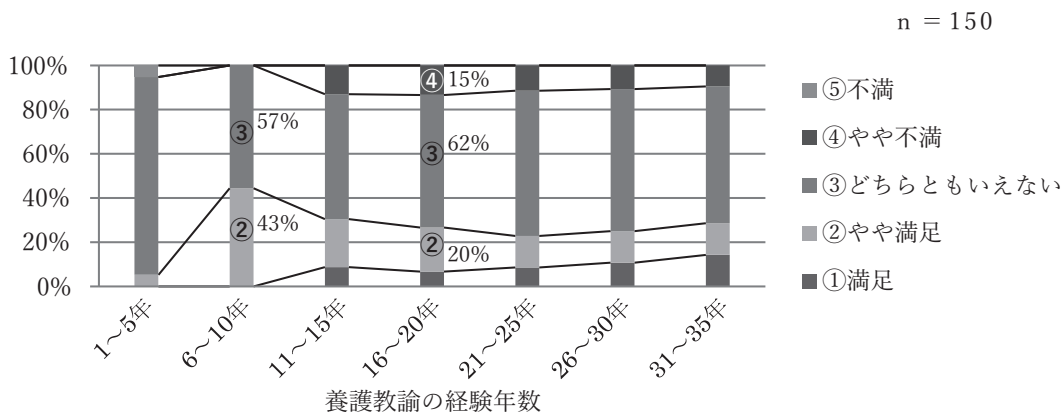


図4 教育機関の性教育への取り組みに関する満足度

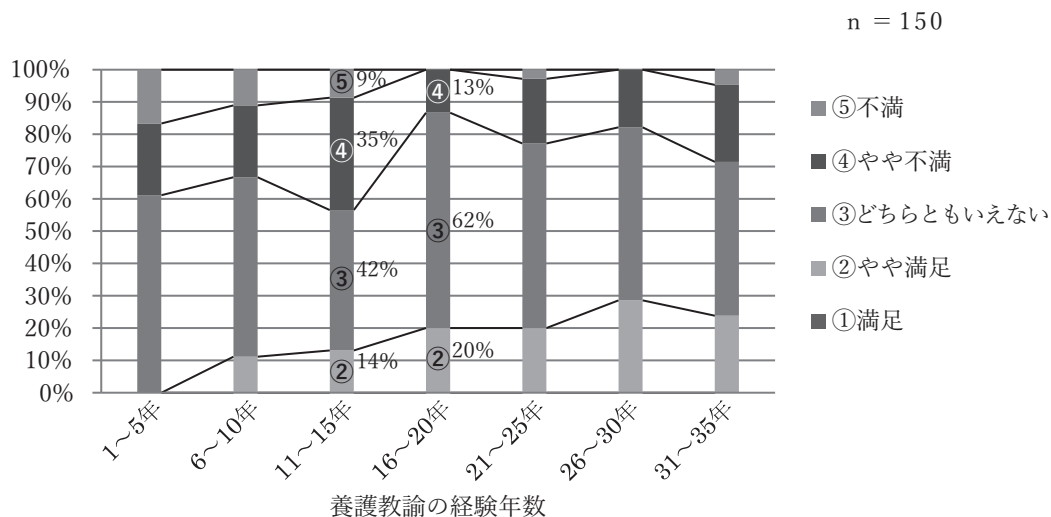


図5 自身の性教育への取り組みに関する満足度

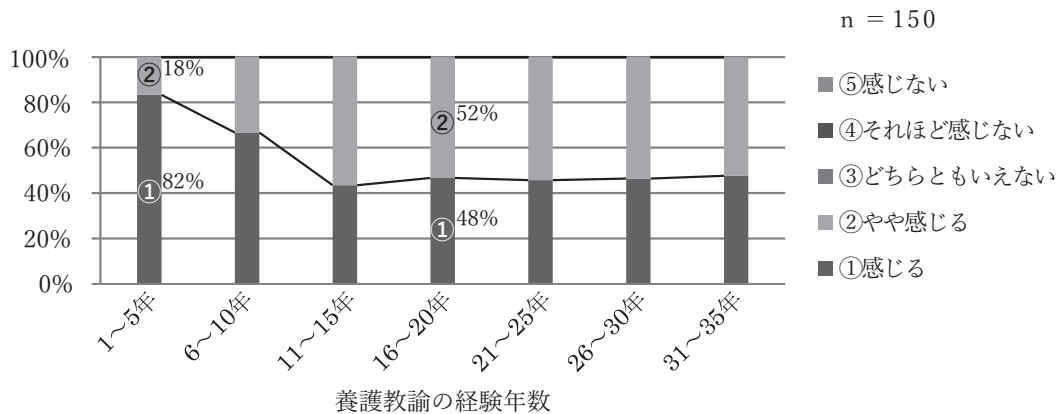
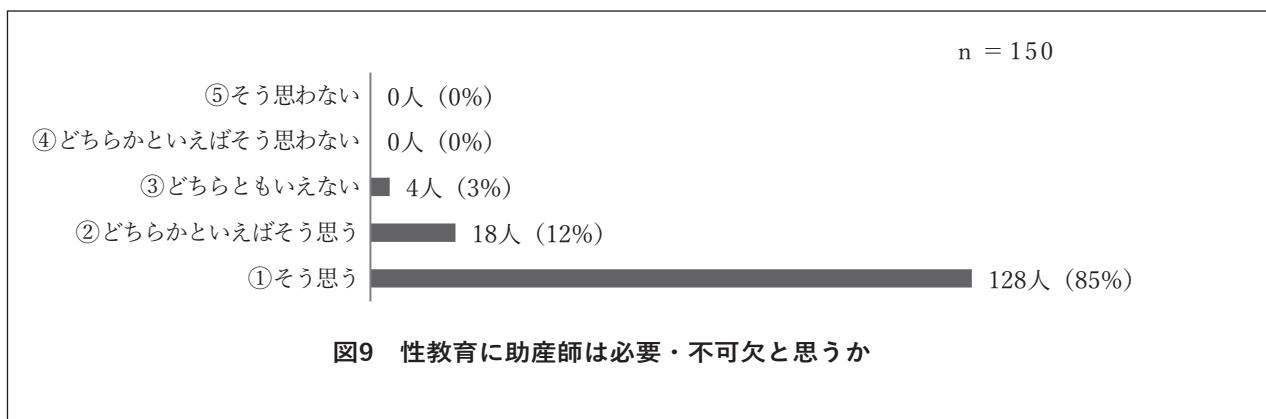
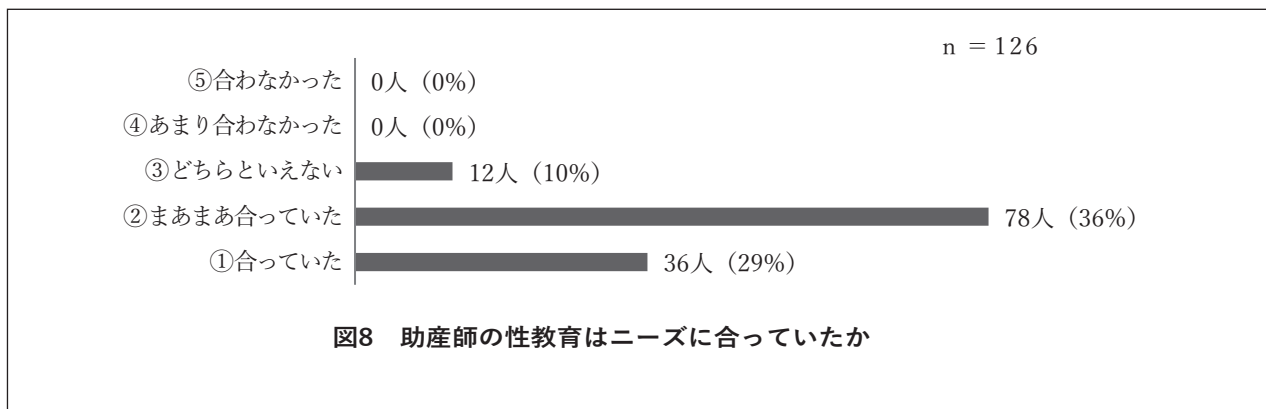
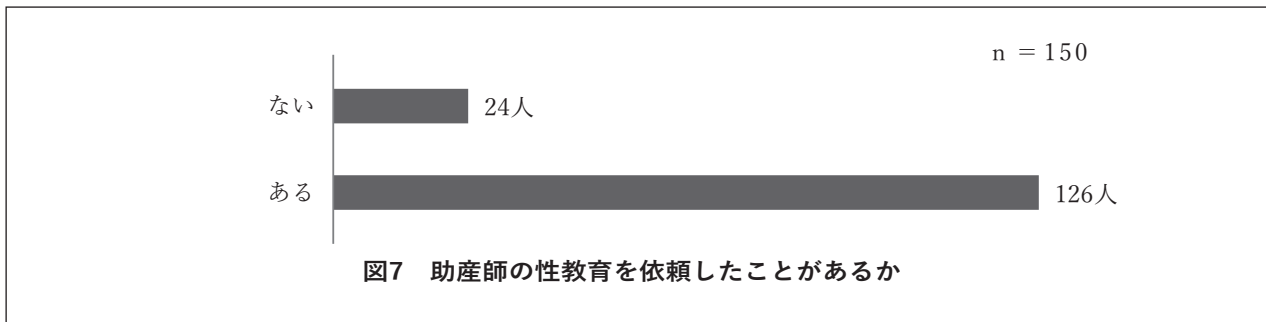
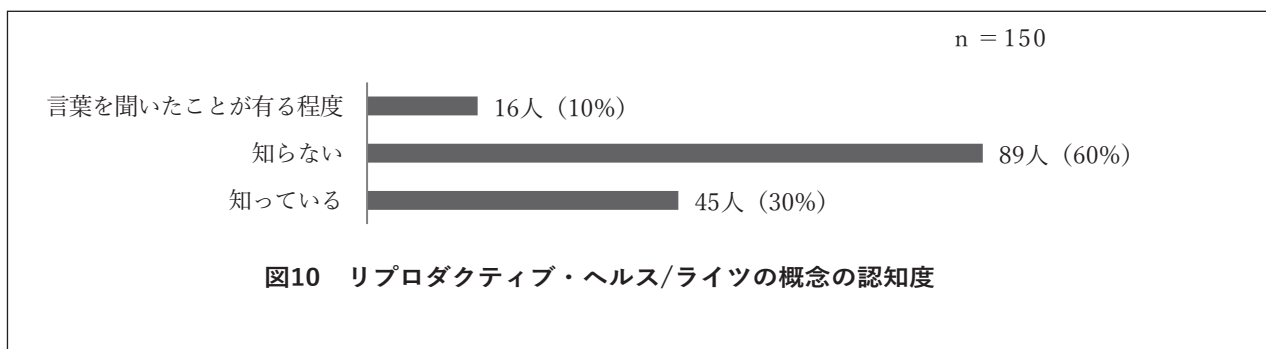


図6 性教育の難しさを感じるか



**表1 助産師に求める主な性教育の内容は何か（自由記載）**

- ・性に関する専門的知識（妊娠・出産・育児・月経・性感染症など）の提供138人
- ・生命誕生の場面やいのちの大切さの語り142人
- ・学生の自己肯定観を高められる内容110人
- ・自分や他者を思いやる心を育くむ内容108人





## V 考 察

教育現場の性教育の現状は、教育機関ごとの取り組みの差や職員間の意識の差があり、これらは思ったように性教育が展開できない要因になっていると思われる。養護教諭の性教育の満足感に影響していると考えられる。

また、養護教諭として経験年数が増えると性教育を実施してからの成果や不成果も体験する。成果が得られると当然満足感に繋がるが、不成果な体験となるとジレンマとなり、性教育の満足感に影響を及ぼすと考える。

さらに、性教育の難しさも多く養護教諭が感じており、難しさを感じる要因は、自身の性に関する専門的知識の乏しさや伝え方に加え、学生自身の多様な性や発達段階への考慮、家族環境への配慮などであり、集団で展開されることの多い性教育だが、今後は個別性を重視した性教育の展開も必要となることや性科学としての性の専門的理解や発達段階に応じた連続性も持った継続的性教育の発展が必要と思われた。

性教育の場に助産師が必要と思う養護教諭は多くみられていたことから、助産師が行う性教育は教育機関で高いニーズがあり、専門的立場で今後も継続して行われることが望ましいと思われた。

また、養護教諭や教育機関が助産師の性教育に期待することは、性に関することの専門的知識の提供は勿論、いのちの大切さを体験者として語り、学生の自己肯定観を高め、自分や他者を思いやる心を育むことであった。これらから、助産師が行う性教育は、専門的知識の提供に留まらず感性に触れる内容で展開することで高い成果が得られると思われた。しかし、一方で、保護者や教員間で、性に関する指導を行うことによって反対に性行動を促すという批判的な考えも根強くあり<sup>1)</sup>、専門的過ぎることや先進過ぎる内容への懸念もある。これら批判や懸念事項を払拭するためにも、事前打ち合わせを必ず実施し、学校側のニーズや保護者のニーズをしっかりと把握したうえで説明し納得を得てから実施する必要がある。

また、学校での性教育は、教師の個人的な意図や見解によって自由に教育活動を行うことは許されない<sup>2)</sup>ことも念頭に置く必要がある。

さらに、性の権利について謳っている“リプロダクティブ・ヘルス/ライツ”の概念について知っている養護教諭は少なく、今後は研究会等の機会を得ながら性の基本概念でもあるリプロダクティブ・ヘルス/ライツの周知にも努めていく必要があると思われた。

## VI まとめ

教育現場の性教育の現状は、教育機関ごとの取り組

みの差や職員間の意識の差があり、これらが養護教諭の性教育の満足感に影響していた。また、養護教諭として経験年数が増えると性教育を実施してからの成果や不成果も体験し、これらの体験も性教育の満足感に影響を及ぼしていた。

さらに、性教育の難しさも多く養護教諭が感じており、難しさを感じる要因は、自身の性に関する専門的知識の乏しさや伝え方に加え、学生自身の多様な性や発達段階への考慮、家族環境への配慮などであった。

性教育の場に助産師が必要不可欠と思う養護教諭は多くみられ、助産師の性教育は教育機関で高いニーズがあることが分かった。また、助産師の性教育に期待することは、性に関することの専門的知識の提供は勿論、いのちの大切さを体験者として語り、学生の自己肯定観を高められ、自分や他者を思いやる心を育むことであった。しかし、一方で専門的過ぎることや先進過ぎる内容への懸念があるという意見もあり、学校側のニーズ把握のためにも事前打ち合わせを行う重要性も同時に示唆された。

将来的に性教育は、単発的な講義・講演で終わるのではなく、“いのちの教育”を根底に性科学的な内容も加味した継続的な授業の一環として科目立てされ、教育機関と専門職者が連携しながら時代のニーズに即しながら展開され、さらに発展していくことが望ましいことも示唆された。

## VII 本研究の限界と研究の課題

性教育は、その時代の抱える社会的性の問題に即した内容で展開することも求められる。今回の研究結果は現時点での結果であり、将来的にニーズは変化する可能性がある。今後は、時代の流れや変化ごとに機会を得ながら教育機関が助産師の行う性教育にどのようなニーズをもっているのかを検証し継続的に探究していく。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、趣旨を理解し快く協力いただきました養護教諭の皆様へ深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 石沢敦子, 矢島まさえ, 佐光恵子, 小林亜由美, 梅林奎子: 思春期における子どもの性教育のあり方(その1). 群馬バース学園短期大学紀要 Vol.6.3-11 2002
- 2) 堀内比佐子: 学校における性教育の現状と課題. 周産期医学 Vol37.No.8.997-999.2007

## Needs for Sex Education by Midwives — Clarified from a questionnaire survey of school nurses —

Miho Shiramizu, Erika Shinpuku, Hiroko Nagai

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,  
Kagoshima Immaculate Heart University

**Key words** : midwife, school nurse, sex education, educational institution, life and death education

### Abstract

In this research study, we conducted a questionnaire survey targeting school nurses, who are often in charge of sex education in educational settings, with the aim of improving and developing the quality of sex education provided by midwives. From the results of the survey, we clarified the current situation of sex education in educational settings and the needs for sex education conducted by midwives.

The current state of sex education in schools is that there are differences in the approach taken by each educational institution and differences in awareness among teachers. These factors influenced their satisfaction with sex education. Also, as the number of years of experience as a school nurse increased, the success or failure of their sex education accumulated. These experiences also influenced their satisfaction with sex education. Furthermore, it was found that many school nurses felt the difficulty of sex education. From the survey results showed that the factor was their lack of professional knowledge about sexuality. They also seemed to find it difficult to communicate sexual matters. How to consider the students' diverse gender and developmental stages, and how to consider their family environment were factors that made them feel that sex education was difficult.

Many school nurses felt that midwives were needed in sex education settings. It was found that midwives have a high need for sex education at educational institutions. Their expectations for sex education by midwives were as follows: "Providing specialized knowledge about sexuality" "Talking about the importance of life based on real experiences" "Raising students' self-esteem" "to nurture their minds of "caring for others and themselves"". On the other hand, there were also opinions that there were concerns about the content being too specialized or too advanced, suggesting the importance of pre-meetings in order to grasp the needs of schools.

In the future, sex education should not end up as one-off lectures, but should be positioned as part of a continuous class that incorporates bioscience-based content based on "life and death education". It is hoped that educational institutions and specialists will work together to meet the needs of the times and to develop further.

---